東海道五十三次 掛川ウォーキングマップ

静岡県掛川市

掛川宿

【『東街便覧図略』（名古屋市博物館所蔵）に描かれた葛布屋】

東海道五十三次品川宿から数えて26番目の宿

掛川宿は、天保14年（1843年）の記録によると、本陣2軒、旅籠屋30軒等960軒の家があり、3443人が住んでいた。宿の東寄りの天然寺と西端の円満寺は、朝鮮通信使が来聘（貢ぎ物を献上する）した折には宿所として使用された。元禄4年（1691年）に東海道を旅したケンペルの『江戸参府旅行日記』（平凡社「東洋文庫」）には、「この町の両側（東西）には郭外の町があり、門と番所がある。北側には城があり、檜のない簡単な石垣で囲まれ、中には高くそびえた白壁の天守閣があり、大きな城に美しさを添えていた」と記され、安永5年（1776年）のツュンベリーの『江戸参府随行記』には「防備された大きな町、掛川」と表現されている。

本陣があったところ（連雀）

掛川城御殿

掛川城天守閣

大手門

日坂宿

【『東街便覧図略』（国立国会図書館所蔵）に描かれた蕨餅屋と東海道】

東海道五十三次品川宿から数えて25番目の宿

日坂宿は、天保14年（1843年）の記録によると、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠屋33軒等、168軒の家があり、750人が住んでいた。静岡県内22宿の中で、規模と人口の両面において、由比や丸子等ともに小さな宿ではあったが、東海道の三大難所の一つ日坂峠を控えた重要な宿であった。大田南畝の『改元紀行』には、日坂宿の家々は蕨餅を売り、足いたみの薬等を売るものも多いと記されている。

当時の姿に復元された川坂屋

藤文蔵

高札場跡

萬屋

■掛川市のご案内

■お問い合わせ

掛川市役所観光・シティプロモーション課
〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1
TEL.0537-21-1121　FAX.0537-21-1164
URL/ https://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/kanko/

掛川観光公式 Instagram
掛川観光公式 Facebook

掛川観光協会ビジターセンター「旅のスイッチ」
〒436-0029 静岡県掛川市南1-1-1
TEL.0537-24-8711
URL/ https://www.kakegawa-kankou.com

2024.2作成

東海道五十三次 掛川ウォーキングマップ

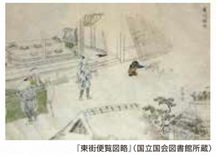
1 瀬川

一名原野谷川、長さ29間1尺（約53m）、幅3間（約5.5m）の土橋が架かっていた。

2 原川町

掛川宿へ1里10町（約5km）、袋井宿へ1里6町（約4.6km）と、両宿のほぼ中間に位置し、旅人相手の茶屋や酒屋等が立ち並ぶ「間の宿」であった。

3 金西寺



［東街便覧図略］（国立国会図書館所蔵）

本尊の阿弥陀仏は、「足痛薬師如来」と呼ばれ、東海道を旅する人が餅を供えて道中足の痛みに悩まされることがないように祈願した。

4 松並木

市内の東海道には松並木が一般的に見られる風景であったが、現在も面影を残すのはここだけ。

5 善光寺下

土地が低く、長雨にあうと排水が悪いうえに菫木川が氾濫して東海道が冠水すると、川越人足が駆り集められたり、舟渡ししたりすることもあった。

6 大池一里塚

一里塚は、1里（約3.9km）ごとに街道の両側に5間（約9m）四方の盛り土をし、中央に榎や松を植えた塚のこと。天保14年（1843年）の記録によると、この一里塚には松が植えられていた。

7 大池橋

［東街便覧図略］（国立国会図書館所蔵）

東から来て大池橋を渡ると、火防の神秋葉山へ通じる秋葉街道の入口で、秋葉山一ノ鳥居と称された青銅製の鳥居と常夜灯が建てられていた。

8 十九首塚

関東一帯を勢力下におき自ら新皇と称し、関東の独立を図ったが、天慶3年（940年）に討ち取られた平将門以下19人の首塚と伝えられる。

井伊家の資料等によると、永禄5年（1562年）、今川家の家臣、井伊直親が20人余りの家臣とともに、この地で掛川城主朝比奈泰朝らに討たれたとある。直親は、関ヶ原の戦等で徳川家康に従い戦功をあげた井伊直政の父。

9 七曲り

東海道の東から掛川宿に入るには、新町の木戸跡から木町番所跡を経由し「七曲り」もしくは「七つかど」と呼ばれる七カ所も折れ曲がった道を通ることになります。これは城郭同様、城下町も防備の一環として設計されたもので、有事の際の敵の進攻を遅らせる効果がありました。江戸時代には政情も安定し、戦国時代のような軍事的防備と言うよりも城下町内の危機管理のために用いられました。

10 葛川一里塚

江戸時代には、増田村地内にあった一里塚で、天保14年（1843年）の記録では松が植えられていた。

11 大頭龍大権現・福天権現道標

おおがのりょうだいごんげん・ふくてん

大物主命を祭る大頭龍大権現（菊川市大頭龍神社）と大福天という天狗を祭る福天権現（菊川市竜雲寺）への道標。掛川から川崎湊（牧之原市）まで続く川崎街道の起点でもあった。大頭龍大権現まで2里（約7.9km）、福天権現まで1里（約3.9km）、川崎湊まで6里（約23.6km）の道程であった。

12 山鼻

日坂宿から30町（約3.3km）、掛川宿へ35町（約3.8km）と、両宿のほぼ中間にあたり、旅人を相手とする茶店が多くあった。

13 石川依平出生地

寛政3年（1791年）に生まれ、6歳にして歌を詠む神童、17歳で栗田土満（賀茂真淵の弟子）の門下となり、国学者、歌人として寛保元年（1741年）の夏、竜雲寺の和尚の弟子に憑き物があり、「吾は天狗なり、名を大福天という。寺の向かいの山に祠を建て、福天権現として祭るべし」とのお告げがあった。その後も種々の奇妙なことが起こったので、寺では掛川藩主小笠原家に願い出て、「祠を建てたい」と申し出たところ、「新規の寺社は国家の禁制である」という理由で許可されなかった。しかし、その後掛川でも不思議なことが起こったため、掛川藩も「古来より祠があったということにして建てるならば差し支えない」と回答したので、寺では翌年の正月までに祠を建てた。建立後、足の不自由な人が参詣したところ、その日のうちに歩いて家に帰ることができた等の不思議なことがあり、信心深い人々が参詣して賑わったということである。

14 伊達方一里塚

江戸時代には、牛頭村に属していた。天保14年（1843年）の記録によると、榎が植えられていた。

15 福天権現道標

「福天権現」と刻まれているが、下部を欠損する。「寛保二年」（1742年）と「日坂町連□□」とある。東海道を上下する旅人の興味を引いたようで、大田南畝の『改元紀行』にも「掛川領にいれば、左に福天権現本道とあり。いかなる神ならんかし。（以下略）」とある。

その名を馳せた。その教えを受けた者10余ヶ国、300余名に及んだという。安政6年（1859年）没。

16 塩井神社

一日に3度（昼の四つ時、八つ時、暮れ八つ時）塩水が出るところがあって、そこを塩井と呼び、川を塩井川と言ったとされる。今は塩井神社と呼んでいるが、江戸時代には、潮河明神等と呼ばれていた。

17 雄鯨山・雌鯨山の伝説

むかし、宮村に神様がいて、姫があった。神と姫が囲碁をしていると、竜宮が雄鯨と雌鯨を使いによこして、姫を貰いたいと伝えてきた。そこで、神は姫を隠して、碁石で2頭の鯨を打ち殺した。すると、鯨の一念が凝り固まって山となってしまったという。

18 嫁が田・姑の畑の伝説

むかし、嫁に辛くあたる姑がいた。ある時、嫁に「今朝のうちに一反歩（約990m²）の田に苗を植えよ」と厳しく言い付けた。嫁は、姑の言い付けに背いてはいけないと懸命に植えたが、植え終わることができず、とうとう付近の石に腰を掛けたまま死んでしまった。一方、姑は畑に出て仕事をしていたが、突然鳴りだした雷に恐れをなし、生家に入ったとたん、落雷で死んでしまった。

それから、嫁が仕事をしていた田を「嫁が田」、姑が仕事をしていた畑を「姑の畑」と呼ぶようになったという。

19 事任八幡宮

平安時代の清少納言の『枕草子』、鎌倉時代中期の歌人阿仏尼の『十六夜日記』等の紀行文に名前が見える。東海道を往来する人々が参詣した。

20 夜泣石跡

夜泣石は、高さ3尺（約90cm）、幅2尺（約60cm）の丸石で、東海道の真ん中にあり、「南無阿弥陀」の5字が彫ってあった。明治14年（1881年）に東京で開催された内国勧業博覧会に出品され、その後、国道1号線沿いの小泉屋の脇に移された。

21 芭蕉句碑

延宝4年（1676年）、松尾芭蕉が江戸から伊賀上野に帰る途中で作った句「命なりわづかの笠の下涼み」の碑。西行を敬慕していた芭蕉が、西行の「年たけてまた越ゆべしと…」の和歌を踏まえて作ったと思われる。

22 佐夜鹿一里塚

東海道の起点である日本橋からこの一里塚までの里数の記録はないが、前後の一里塚の言い伝えには里数や当初の東海道のルート等を考えると、日本橋から56里の一里塚として築かれたものと考えられる。

23 西行法師歌碑

西行は、元永元年（1118年）生まれ、俗名佐藤義清（憲清）。武士の家に生まれ、北面の武士として仕えていたが、23歳で出家。その後、高野山等に隠棲する一方で諸国を遍歴、建久元年（1190年）に死去。後世の歌人に大きな影響を与えた。

この「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」の歌は、文治2年（1186年）、東大寺再建の勧進のため奥州藤原氏のもとへ赴く途中で、かつて小夜の中山を通ったことに思いを馳せ、詠んだ歌。

24 久延寺

［東街便覧図略］（国立国会図書館所蔵）

真言宗の寺院で、山号佐夜山。本尊は子育て観音と称され、「むかし住職が、山賊に殺された妊婦の子を育て、成長した子は親の敵を討つことができた。これはひとえに本尊の加護によるものであり、故に子育て観音と称す」といういわれがある。慶長5年（1600年）、会津の上杉景勝討伐に向かう徳川家康を掛川城主山内一豊が茶亭を建ててもてなしたところと伝われている。

25 小夜の中山

小夜の中山は、古くは『古今和歌集』以来、歌枕として数多くの歌に詠みこまれるとともに、紀行文には心細く寂しい山の道と表現されている。しかし、近世になると旅人を相手に「飴の餅」を売る茶店が多くあり、山道の難儀さは変わらないが、寂しいところという表現はみられなくなる。「飴の餅」は、搗きたての餅に水飴を掛けて、碗に入れて箸で食べた。文政9年（1826年）、シーボルトがオランダ商館長に従い江戸まで旅行をした帰りの記録に、「伝説の山、日坂峠を歩き、峠の茶屋で茶を飲み飴を食べて、元気を取り戻した。丘の連なるすばらしい景色をながめ、かわいらしい山の娘と楽しい言葉をかわし、指輪とかんざしを彼女にやった。」とある。

※シーボルトは、長崎出島のオランダ商館長付きの医師として来日したドイツ人の医師で博物学者。（シーボルト著『江戸参府紀行』平凡社「東洋文庫」より）